

五歳の戦争体験

上村 玲子

鷺宮六丁目

今から十数年前に、各々六五歳で他界した私の両親は、親の代からの中野生まれの中野育ち。私達兄弟姉妹も中野で生まれ育った。だから戦争中も逃げる田舎もなく、今は兄の代になった上高田の家で、戦禍に耐えていた。

当時入学前の僅か五歳だった幼い私の目に焼きつき、今ではつきり浮かんでくる光景がいくつもある。

私のすぐ上の兄と姉は学童疎開。その上の二人は女学校から工場へ動員。父は終戦間近の応召。小僧さんや女中さん達を何人か使って雑貨の間屋をしていたらしい実家も、のれんを下ろしていた。

一番怖かったのは、今思うと、東京の大空襲の夜だったのだろう。いつものように自宅の庭の防空壕に逃げ込んでいたが、その日はそれでは危険ということで、東光寺さんの防空壕に逃げていくことになった。警報のサイレンの中、妹を背負った母と、弟を背負った姉が、はぐれない様に私の手を両方からしっかりと握る。坂の上から向かいの目白の山の方を見ると、探照

燈が照らす中、魚の行列のように焼夷弾が空から降っている。道の両側には火も見える。火を防ぐために母と姉が持っていた貴重な座布団も、火が付けばかえって危ないと、勿体ない思いで捨て、必死で走る。

お寺さんの防空壕まで逃げ込んだものの、そこも危険ということで、先に逃げ込んでいた他の人達と出される。出入口の両側は、すでにもう火の手が上がっている。燃える中を逃げ出し、「ばっけの原」から今の五中のある所に逃げる。一面の原っぱになっていて、もしそこにも火が回ってきたら、妙正寺川に飛び込む覚悟でいた。一段と大きく真つ赤な炎が上がり、位置からして上高田小学校がついに燃えていると、皆でふるえながら話していた。

周りが皆燃えてしまった中で、角地かどちにある実家は、続く家並を守る為もあり、ご近所の皆さんが水を掛けて下さったりして、幸い焼け残った。そして戦後は、町会の連絡所のようになっていた。終戦の「玉音放送」も、ご近所の方達が沢山集まり、実

家のラジオで聴いた。何もわからなかった私が家の中で歩いて叱られ、あわてて皆の様に正座してうつ向いたのを覚えている。兄と姉が疎開から帰ってきた日、きょうはご馳走だよと言って、ガリガリにやせた二人の前に並んだ夕食は、蒸しただけのじゃがいもとかぼちゃだけだった。

米粒がほとんど入っていない汁ばかりの雑炊の配給で、新井薬師寺への道の入口付近にあった食堂に、食券とお鍋を持つての長い行列で並んだことも覚えている。

実家が町会の配給所になっていた私達にとつての楽しみは、配り終って空になった粉ミルクの缶のまわりに僅かについているのを指でなめることだった。順番を兄妹で取りっこしたのも、当時としては無理もなかったわけである。

物の無い言い尽くせない貧困の中でも、幸い皆無事に生き抜けた。

今自分が、同じこの中野で家庭を持ち、親となり、幸せにいられるにつけ、あの頃、子を想い家族を想っても、どうにもしてあげられなかったであろう母の辛さ、愚痴一つ聞いたことのなかった強さをしみじみ思い出す。

両親共癌に負けてしまったが、この平和の中でもっと長生きをして人生を楽しんで欲しかった。

それにしても、難しいイデオロギーを抜きにして、二度と体験したくない思い出である。

